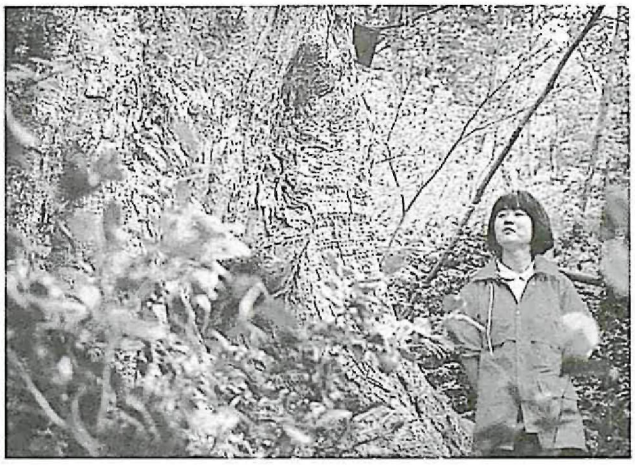
トチノキの呼び名について

横　山　健　三

「五泉トチノキ守りの会」に招かれて講演した際（11月20日）、聴講者の方からトチノキの名の由来について質問されたが、解答ができなく宿題にして帰ってきた。早速、植物の語源に詳しい横山健三氏にお聞きしたところ、すでにトチノキの語源について記録した文献をお送り頂いたので、ここに再録することにした。

その１　横山健三（1980 昭和55年）植物名の語源をたずねて．ことばとくらし 第6号：15－54（トチノキは35－36）．新潟県ことばの会．［次頁掲載］

その２　横山健三（1983 昭和58年）植物名の語源をたずねて（二）（三）．ことばとくらし 第7号：24－45．新潟県ことばの会．



－菅名岳トチノキの古木－

トチノキ　その２

横山　健三（一九八三）

【トチの語源】

一、朝鮮語という説

深津正著『植物和名語源新考』（昭和51年・一九七八年）には「そもそもトチの語源は朝鮮語のTotoiによるものといわれている。ところがTotoiは狭義ではトチノキのことであるが、広義ではドングリ、それもクヌギの実に限らず、トチの実を含めた一般名称であるドングリ（つまり広義のkui-bam）をも意味する場合がある」とある。

清水清著『植物の名前小事典』（昭和53年・一九七八年）には「朝鮮語のTotoiからきたのではないかといわれている。」とある。

小生も、朝鮮の植物名を調べているが、類似している名称がたくさんあることに注目している。類似しているということだけでおわらずに、類似していたら、朝鮮語でどんな意味の名称なのか、そこまで知りたいものである。朝鮮に文化国家の時代があり、日本も影響を受けたこともあり、特に朝鮮（南朝鮮）とある時代に言語が同一であったと想定できる時代も考えられるといわれる。当然、植物名に類似のものがあって不思議でない。

難解な日本の植物名はすぐ「外国語と関係ないか」と、島国から外国を見渡すと、必ずと言ってよいほど、必ず、類似した名称があるものだ。不思議なほどであるが、そこをもう一度、これはどうだろう、あれはどうだろうと、日本語で、なんとか解釈してみたいというのが、小生の本心である。

二　巡論の解説

伴信友著『動植名彙』（序一八二七年）の、トチの項に注目すべき一項がある。本書によると『大同類聚方』に「止知乃美」又は「度知之美之」（五巻）「止智久留味」又は「止智久留免」（卅七）「止知久美」とあるという。この本は引書節目に「今現本疑書ナレドモフルキモノニヨレルモミユレバ参考ニ備フベシ。」と注書きがしてある。大同年間は八〇六～八〇九年である。

この記録のトチノミ・ドチノミノ（？）・トチクルミ・トチクルメ・トチクミの中、トチクルメ・トチクミという名称は注目すべきだろう。この二名称は「綴ち包み」また「綴ち組み」ではないかと推察されるからである。そして、この本題のトチは綴ち（実）という名称らしいからである。さらにもう一つ「閉ち包み」また「閉ち組み」という考え方もできるのである。

これによって、トチの語源は「綴ち」か「閉ち」かのいずれかという問題がおこるのだ。

また、清音濁音の問題も出てくる。現代は「綴ち」「閉ち」いずれも濁音でトチ（トジ）といっている。これに答えてくれる記録がある。

『類聚名義抄』（前出）には、清濁音と上下アクセントをつけた唯一の漢和辞書であるが、糸ヘンの類義語には、トツと清音記号があり、門ガマエの類義語にはトヅと濁音記号がついている。

「綴・輟・ラチ・テイ・ラチ・ツラヌ・ツヽル・ツヽム・ソモル・ヤム・正ヌヌヒロフ・トツ」

「繼・ツヽム・トツ・ツクフ・ヲサム・ツカヌ」

「結・絜ームスフ（ホシ）・ユフ・ツナク・カナラス・カタナル・ウレフ・アク（屐）・カアフ・ツカフ・ツラヌ・トツ・アツフ・カタシ・舌・係」

「閉・上算・又補結反・トツ・カタシ・フサガル・木ヘイ・ヘチ」

「閉・通・トツ・コム・フサク・ホノカナリ」

「關・上盍關ー大門・トヒラ・トツ」

「關閭・二正・トツ」

「閟・上秘・トツ・ツヽシム・ムカシ」

右の記録より「綴」トツとあり、清音。「閉」トツとあり、濁音。清濁のちがいはあるが、アクセントは下上と同じい。トチ（栃・橡）はトツ（綴）の連用形名詞でトチとなったと推察されるが、尚問題がある。

東北地方は古語の残存が多く知られているが、トチの方言に、トヂ（トジ）とトツという名称があることは注目すべきだ。

倉田悟著『日本主要樹木名方言集』（昭38・一九六三年）に「トジ（青森・秋田・宮城）・トジノキ（青森・秋田）・トンジ（青森・秋田）」という方言と「トツ（秋田（鹿角））・トツノキ（岩手・宮城）」という方言がある。これは語源の面で参考になろう。

トチの語源は「綴ち」（実）の木という意味か。「閉ち」（実）の木の意味か。三裂する前の果皮（果実）の割れ目・裂け目に命名があったと推察される。トチ（綴ち）が有力のように感するが、結局は二説いずれも可とする者だ。

漢字にとらわれると問題がでてくるが、果皮（果実）の形をよく見よう。

トチノキ　その1

横山　健三（一九八〇）

【トチの語源】

トチの名称の記録は日本最初の漢和辞書『新選字鏡』（八九二）に「橡・詐両反木実止知」とある。この名称は奈良時代には見えず、平安時代から見えて、今日まで使用されている。

一、語源説の紹介

(一) 十千多果という説

『類聚名義抄』（一一〇〇年代）には、漢字の「椽・杚・杼（予木）・朽・栩・柠」にトチの和訓があるが、「朽」の漢字には「朽・トチ・十千・義攷」とあり、春山行夫著『花の文化史』（昭36・一九六〇）には「トチという意味は不明であるが『類聚名義抄』（略）には十千（とち・その実の多いこと）の意味だとなっている。」とある。

(二) チチノミ転訛という説

『万葉集』にはチチノミ（枕詞）があり、漢字で「知智」（巻十九）・「知知」（巻二十）とあるが、チチがトチになったという説である。福井久蔵著『枕詞の研究と釈義』（昭35・一九六〇年）には、江戸時代の『詞草小苑』『冠辞考略』に「ちちの実とは橡（とち）の実をいふ」とあるという。松岡静雄著『日本古語大辞典』（昭4・一九二九年）には「チチノミ」の項に「古はよく知られた木であったらしく、チチブ（秩父）といふ地名もチチ実の転とおもはれる。恐らくは今いふトチ（栃又橡）のことであろう。」とある。

(三) アイヌ語「トチ」という説

杉本つとむ著『日本語再発見』（昭35・一九六〇年）には「白樺の樺はアイヌ語のkarapaでカバ、カンバ（省略）ートチの木のトチもtochiでアイヌ語の木の名らしい。」とある。

また、楳垣実著『舶来語・古典語辞典』（昭37・一九六二年）にもトド松の次に「トチ（栃・橡）という木の名も、アイヌ語らしい。アイヌ語ではトチニ（tochi-ni）といっているが、ニは「木」の意味だから、同じ語であることはまず間違いない。」と説明している。

これらの説は、左記のアイヌ人言語学者・知里真志保著『分類アイヌ語辞典』の影響があろう。

※アイヌ人の言語学者・知里真志保著『分類アイヌ語辞典』（植物篇・昭28・一九五三年）に「(1) tochi（to-chi）〔とち〕果実（幌別）」とあり、「(2) tochi-ni（tochi-ni）『トチニ』茎（同上）」とある。

(四) 意義不明という説

牧野『日本植物図鑑』（昭15・一九四〇年）には「和名のとちノ意義不明。」とある。

(五) 綴ち（実）という説・閉ち（実）という説←愚説語源

これは果実を観察すると、綴ちた形状をしているので命名されたと思う。この場合は果実よりも果皮といった方がよいだろう。熟すると、綴ちた果皮が三裂して種子がでるが、三裂する前の果皮の形は「綴ち」ている。この割れめ、裂けめを「綴ち」（実）と命名したのである。